

随想

花見酒の経済

熊さんと辰つぁんは経済を行ったのか

加藤 宏光

今年二月三日、朝日新聞六面に「波聞風問」というコラムがあり、原真人という編集委員が「いま考える花見酒の経済」と題して、以下の論説を開陳している。

半世紀前に論説主幹を努めた笠信太郎(りゅうしんたろう)は「花見酒の経済―一九六二年」で知られた経済ジャーナリストである。笠は当時はわが国の高度成長期であったものの、「内実は地価高騰・K銀行の貸出膨張で実体経済がかさ上げして見えていたに過ぎない」としていた。そして、それは正しかった、と原氏は続ける。八〇年代のバブル経済とその崩壊を予見する慧眼は今も生きている。「花見酒」は古典落語で、熊さんと辰

つぁんが花見がてらに酒を売って儲けようとするが、借金をして仕入れた酒を担いで行楽地へ向かう道すがら、我慢できなくなった熊が釣り銭用の一〇文を辰に払ってコップ酒を飲む。この一〇文を逆に熊に払って辰がコップ酒を飲む。こうして飲みながら目的地に着いたときには酒樽は空。金も一〇文しか残っていない。このストーリーを笠は「酒の売掛金が膨らんだように見えるが、しょせん二人の間やりとりで過ぎない。借金だけが残っては意味がない。かさ上げされたバブル経済と同じ」と捉えている。そして、原氏はこの見方に否を唱える。

落語の話では、熊さんと辰つぁんは計画どおり儲けられなかったものの、道すがら景色や会話を楽しみ、酒を満喫した。一〇文銭は二人の間を高スピードで回転し、互の満足度も高めた。これは、理想的なサービスマ消費といえよう。成熟社会でデフレを解消するに「むしろ範を仰ぐ話」と思える、としている。さらに氏は「今の日本経済に足りないものは人生を楽しむために金を使って内需を拡大することである」としながらも、「政府の借金が積み上がり、実体経済が成長しない現象こそが笠の花見酒」と結論付けている。

これを読んで読者の皆さんはどう思われるだろうか。著者は原氏の論理に、異様な違和感を持たざるを得ない。資金を借り入れて商材を購入し、それを販売することで経済が成り立つ、という概念は確かにうなずける(もっとも金銭のみに依存する経済の時代が過ぎつつある、という考え方も強まっている。この点は機会を改めて触れよう)。「経済は回転である」と誰かが述べていた。熊さんと辰つぁんの間で一〇文銭が回転した、とすれば狭義では経済と例えられよう。しかし、購入した資金を借入れたからには返済が必須であり、一〇文銭が二人の間で行き来しただけでは返済資金は生まれない。景色を見て、酒を飲んだ時間が楽しかったからサービスマ業が成立した、という論理にどうして繋がるのだろうか。半世紀も前の笠氏のかさ上げした経済がバブル経済だ、とい

う意見はある意味うなずける。とはいっても、一九六二年に論述された土地バブルと銀行の貸出金のかさ上げが、八〇年代のバブルに直結して論ぜられていることには納得できないものもある。

確かに、著者の奉職後四〇五年（一九六九〜七〇年）当時は大阪市の土地値はすでに急上昇していた。「土地で儲かり過ぎるから、営んでいる採卵養鶏業で損をした」と税務署に主張できるように、鶏病発生診断書を被害が大きいように書いて欲しい」と生産者に申し出られ、失望のあまり、「鶏の獣医師を辞めて医師になり直そうか」と真剣に悩んだ時期である。なお一九七三年十二月より一七三年三月間続いた安定成長期は一九九〇年のバブル崩壊で終焉を迎えた。この間の経済成長は、一七年という長期にわたって維持されていたことや生産業の伸びによって支えられていたことを考え合わせれば、一九八五〜九〇年までの地価高騰による

裏付けの乏しいバブルとは一線を描きすぎである。

景気の循環というサイクルもしくは波が語られている。コンドラチェフの波¹、クズネットの波²、ジュグラーの波³、キチン循環⁴等、五〇年、二〇年あるいは一〇年、四〇か月といった経済の循環が歴史上で確認されているように、要因に応じて経済にはさまざまなサイクルがあることが知られている。一七年にもおよぶ長期的な安定成長は、最短の循環キチン循環が四サイクル回転する期間であり、一〇年単位のジュグラー循環でさえ二サイクル近く回るようになる。また、この成長期には銀行のみならず商社も金融機能を発揮し、養鶏産業界が高度に成長するに当たって大きな役割を果たした。

という指摘さえ時期を逸しているとも思える。

日本がバブル経済に浮き立っていたのは、この最後の五年余りの時期で、土地本位制ともいえる地価の右肩上がり神話に浮かれた金融が一斉に、「土地さえあればいくらでも貸し出す」という愚挙に出たためとって間違いない。

経済といえば再生産が可能な循環を前提とし、そのために売価に適正な利潤が含まれていなければならぬ。たとえそれがサービス経済であっても。しかるに、現在のEDLP (Every Day Low Price) という量販店の流れは、生産者の生き残りを否定するかのような基準が押し付けられているケースが多い。熊さんと辰つあん⁵の経済と類似するかのよう⁶で落語と違って苦々しい。

原氏の弁は、いま自民党が行おうとする「人からコンクリートへ」という政治方針への迎合と見えてならない。著者は「人からコンクリートへ」という自

民党の方針に異議を唱えるつもりはない。むしろ賛同の意が強い。まず、金を動かさねば人へ金は流れまい。その時忘れてはならないのは、必要なインフラへ適正な投資がなされること、動いた金が適正に一般労働者へ還流されることである。

脚注

1) コンドラチェフの波…五〇年サイクルの循環。ロシアのコンドラチェフによって一九二五年に提唱された。蒸気機関や紡績機械の発明等、産業革命のあと起きた経済の伸長をもとに考察された説で、新しい技術開発が産業に定着して起きるものとされる。今世紀のIT技術に代表されるSNSやフェースブックあるいはツイッターが次の波を起すものと期待されている。
2) クズネットの波…サイモン・クズネットが一九三〇年に主張。二〇年を単位とするサイクル。住宅、生産施設の更新に起因する。クズネットはシュンペーターの景気循環説に批判的。
3) ジュグラー循環…フランスの経済学者クレメンス・ジュグラーが一八六〇年に主張した、約一〇年周期の循環。シュンペーターがジュグラー循環と名付けた。
4) キチン循環…アメリカの経済学者、ジョセフ・キチンが一九二三年に主張し、シュンペーターによって名付けられた。企業の在庫変動に起因すると考えられるサイクル。